

平成 27 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

澁谷 拓巳¹・原田 桃佳²・藤倉 由佳¹・宮本 翔吾³・飛田 航⁴・後藤 武俊⁵

¹ 東北大学教育学部

² 東北大学文学部

³ 東北大学経済学部

⁴ 東北大学医工学研究科

⁵ 東北大学大学院教育学研究科

本稿は、2003（平成 15）年度より活動を続けている「東北大学学校ボランティア」事業（以下、学校ボランティア）の 2015（平成 27）年度の取り組みを報告するものである。

1. 「学校ボランティア」概要

1.1. 実施体制

学校ボランティアは、東北大学大学院教育学研究科・教育ネットワークセンターの事業の一環として行っている取り組みであり、同研究科の後藤武俊准教授を顧問とした事務局を設置して運営を行っている。事務局は学生で構成されており、現在の局員数は 4 名（今年度前期までは 5 名）である。また、川内南キャンパスの文科系総合研究棟 6 階にある教育ネットワークセンターに学校ボランティアの窓口を設け、ここで様々な活動を行っている。

学校ボランティアの活動先は、仙台市内の小・中学校であり、仙台市教育委員会（以下、仙台市教委）の学生サポートスタッフ事業に対して学生のボランティア派遣を依頼した学校が主である。仙台市教委経由の依頼の場合、学生は仙台市教委の学生サポートスタッフ事業のスタッフとして正式登録され、ボランティア保険や一部遠方地域へのボランティアの際は交通費の補助を受けることが可能である。また、活動学生に対しては、年度末には仙台市教委より感謝状の贈呈が行われる。

1.2. 活動内容

学校ボランティアの活動内容は、学習指導補助、配慮を要する児童・生徒の指導補助、休み時間の話し相手、または課外活動の補助など、多岐にわたる。

1.3. 活動学生の募集及び派遣方法

事務局では、学部問わず東北大学の全学生を対象として、3 種類の募集活動を行っている。

①教育ネットワークセンター前掲示板

②川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟 1 階 SLA サポート室前掲示板

③メーリングリスト

これらを通じて、仙台市教委から受けた活動依頼情報を学生に発信し、興味を持った学生がいた場合、その学生に事務局の支援体制やボランティア保険など活動に関する事前説明を行った上で、学生を派遣するというのが基本的な流れである。

2. 平成26年度 学校ボランティアの活動状況

2.1. 学校ボランティアに関心を寄せる学生の特性

ここでは、前節にて述べたメーリングリストに登録している学生や今年度の活動者についての情報を提示し、学校ボランティアと学生の関係について考察する。

まず、メーリングリスト登録者の所属構成を表1に示す。そして今年度の活動者の所属構成を表2に示す。これらの表から読み取れることを以下に述べる。

始めに、全学部向けの事業ではあるが、事業主体の所属が教育学研究科ということもあつてか、メーリングリスト登録者並びに活動者の中でも教育学研究科に属する学生が多く見受けられる。しかし、活動の割合では教育学研究科の学生は若干減少していることから、依然として理系の学生のほうが小・中学校を対象としたボランティアへ強い意欲を示していることが分かる。

表1 学校ボランティアメーリングリスト登録学生の所属構成

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	29	教育学研究科	7
理学部	7	理学研究科	2
農学部	3	文学研究科	1
文学部	3	法学研究科	1
法学部	2	工学研究科	1
経済学部	1	生命科学研究科	1
工学部	1	大学院合計	12
学部合計	46		

(2016年2月現在)

表2 学校ボランティア2015年度活動学生の所属構成

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	3	教育学研究科	5
理学部	1	理学研究科	2
農学部	1	農学研究科	1
学部合計	7	大学院合計	7

(2016年2月現在)

次に、本年度の活動開始時期を図 1 に示す。グラフは活動開始の件数とその月を年間の累積としてあらわしている。1 人の学生が複数のボランティアを行っているケースがあるため、活動者数と合計の活動件数は必ずしも一致しない。

学生が活動を始めるのは大学の授業期間の開始時期である、4 月から 6 月にかけて活動希望者が集中し、その時期ではすでに年度全体の活動者の半数以上の希望が集まっている。事務局では学生向けの説明会を 5 月と 10 月にそれぞれ 1 回ずつ開催し、積極的に「学校ボランティア」の周知および活動者の募集を図った。ちょうど活動希望の学生もこの時期と重なっており、説明会が学生に大きなインセンティブを与えていると言える。

なお、累積の活動件数が先述した表 2 よりも多く計上されているのは、1 人の学生が複数のボランティアへ参加しているためである。このことから、現在メーリングリストに登録している学生の中でも、積極的にボランティアに参加する意欲を持つ学生と、興味はあるが実際に活動をするまでは至っていない学生に二極化している可能性が考えられる。また、グラフの記述はないが、複数の活動先に参加している学生は、昨年度から継続して活動をしている傾向もみられ、継続したボランティアの活動が、さらなるボランティアへの参加を促していることが分かる。

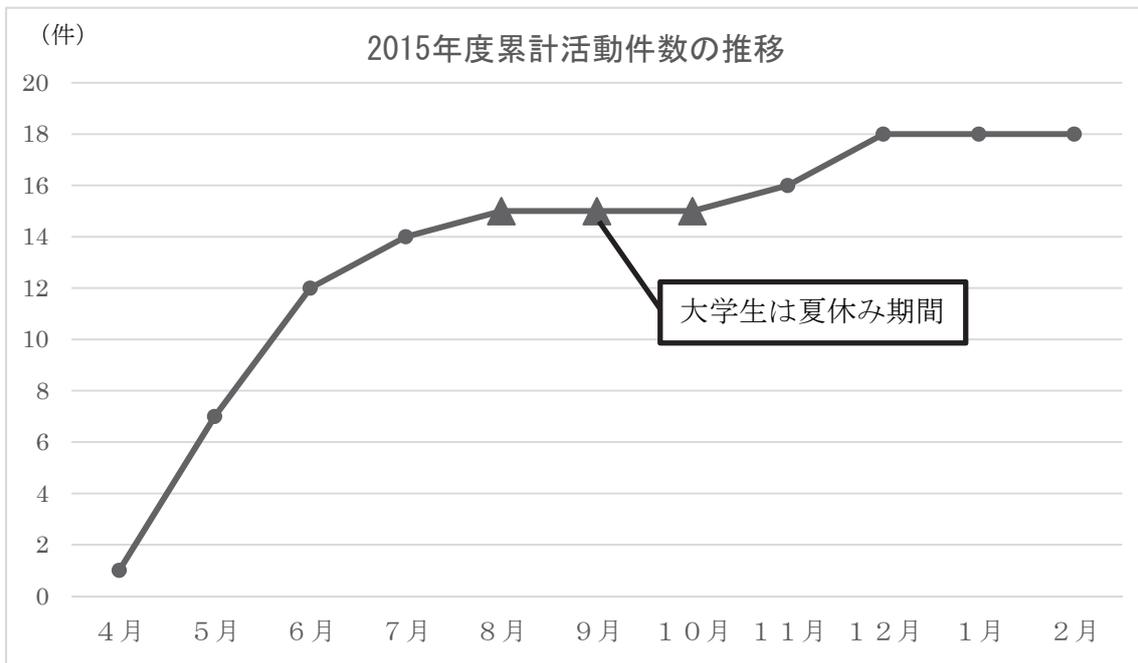


図 1 活動開始時期

※手続き日でカウントしている。

2.2. 派遣学校の特性

まず、活動学生の派遣先学校を地図1示す。この地図により本年度「学校ボランティア」から学生が派遣された学校は、昨年度同様広範囲にわたっているが、地下鉄・JR沿線近くの学校が多く見受けられる。

また、2013年度から今年度までの3年間小学校・中学校への派遣数を表3、派遣学生数を表4に示す。昨年、一昨年に比べ中学校での活動者が増加したことが分かる。



地図1

表3 派遣学校数の推移

	2013年度 (校)	2014年度 (校)	2015年度 (校)
小学校	10	5	4
中学校	6	5	6
計	16	10	10

表4 派遣学生数の推移

	2013年度 (人)	2014年度 (人)	2015年度 (人)
小学校	12	9	4
中学校	9	7	12
計	21	16	16

3. 学校ボランティアを通して得られたもの

ボランティア活動を行った学生に対しては、活動終了後に「活動報告書」の提出を依頼している。活動報告書は、あらかじめ事務局が作成した質問事項に学生が文書にて回答するか、もしくはメールにて回答をする形式である。活動報告書の質問事項は次のとおりである。

○さん(学部生・大学院生)	
活動内容	活動内容(頻度・対象・行ったこと)はどのようなものでしたか？
感想	活動をしてみての感想をお聞かせください。
困った点	活動をしている中で、困った点などはありましたか？(子供に対して、学校に対して、事務局に対して)
要望	事務局に今後行ってほしいことなどがありましたら、ご意見をお聞かせください。

なお、今回、報告書を本稿に記載するにあたって、学校名や一部表現を変更して表現している。また、感想や要望のなかで注目すべき部分については下線で示している。

Aさん(大学院生)	
活動内容	原則、週に1回、高校生の物理の学習支援を実施。 生徒の質問に答える形。
感想	自分の専門教科の勉強に役立ちました。
要望	交通費を支給していただけるとありがたいです。

Bさん(学部生)	
活動内容	小中学生が集まり、時間を決めて集中して自習を行っている中で、その様子を見守りつつ、小中学生から質問を受けたら教えてあげるという活動
感想	小学生が多く、勉強を教えるだけでなく、勉強に集中できなくなってしまった生徒への声かけや、(勉強中に)遊びはじめてちょっと周りの生徒に迷惑かも、という生徒に上手く注意するなどしました。(昨年の活動では)中学生のみで学習指導がメインだったので、 <u>小学生に接することの難しさを知り、良い経験になりました。</u> また、 <u>大学生にもなってしまうと慣れ親しみすぎてどうやって学んだか忘れてしまっている事柄があります。</u> 例えば、四則演算、整数の概念(マイナス)、実数の概念(小数と分数)なんてその最たるものです。ところが、 <u>小学生はこうした概念を学んでいる最中なわけで、素朴な疑問に答えているうちに、むしろ私のほうに発見があり、興味深い勉強になりました。</u>
要望	定期的に学校ボランティアに関する最新情報をメーリングリストに流していただけるなど、手厚いサポートに感謝しております。

Cさん(学部生)	
活動内容	小学生・中学生 2、3 人に対し 1 人の学習支援員が自由に付き、夏季休業中の課題や自分で児童・生徒が持参した教材、学び支援コーディネーターさんたちが用意したプリントをこどもたちが解いている中、アドバイスをします。
感想	<u>子どもとの会話ははじめは難しいと感じたが、子どものペースをつかみ、話しかけられるようになった。</u> 子どもにどう説明すれば分かりやすいかを考えながら実践できるいい機会だった。
要望	活動報告書の提出が遅れてしまい申し訳ありません。 活動が終わったころの時期に報告書提出についてのメールをいただけたらありがたかったです。 また、今回のような短期の学習支援ボランティアをこれからもやってみたいので、 <u>知る機会がほしいです。</u>

Dさん(学部生)	
活動内容	小学校にて2週間に1度の頻度で授業の補助業務や、水泳の監視員等を行いました。
感想	感想としては、自分が小学生として見てきた小学校を別の観点から捉え直すことができ、大変有意義だったと思います。
困った点	児童の授業中の態度、またはプールで遊んでいる様子を見ていて気づいたのですが、「いじめ」ではなくても、余計なちょっかいをかけられる子がいて心配になりました。 <u>部外者の自分がどこまで介入してよいのか(その場で叱ったりしてよいのか)の判断に迷いました。</u>
要望	(活動までの手順などを)丁寧に説明くださり、ありがとうございました。

Eさん(大学院生)	
活動内容	活動頻度は 2・3 カ月に1度、仙台一中にで中1～3の生徒を対象とした定期試験対策の勉強の支援
感想	学習への苦手意識や、つまづきを解消することの難しさを改めて感じました。

Fさん(大学院生)	
活動内容	中学校で勉強が苦手な子を対象に定期テスト前に学習会を行っていました。
感想	生徒たちがどういうところがわからないのかを分かり、今後の教えるときに参考になると思いました。
要望	定期的にボランティア参加者があつまり意見を交換したり、教え方を検討する学習会があればよいと思います。

Gさん(大学院生)	
活動内容	小学校1年生のクラスで、週1回程度、授業補助を行いました。
感想	<u>児童は、今年度のはじめと比較すると、とても成長していて、やりがいを強く感じました。</u>

Hさん(学部生)―①	
活動内容	2週間に1度の頻度で活動しました。中学1年生から高校2年生までを対象として活動しました。この活動では、自習している生徒への手助けをしました。 <u>授業の無い土曜日の午前中に登校し、各自持参した教材を用いて自習するという土曜学習会に参加している生徒に対して、机間巡視をしながら、生徒の質問に答えたり、つまづいている生徒に助言したりしました。</u> 各学年につき1時間ずつ回りました。
感想	昨年度に引き続き参加しました。昨年度の活動では学生サポートスタッフは自分一人だけでしたが、 <u>今年度は自分の他にも他大学の大学生が複数参加していました。</u> そういった方々と課題を共有しながら助け合ってお互いを伸ばしていく体験ができました。また、昨年度は中学1年生から3年生までを対象としていたのですが、今年度は中学1年生から高校2年生まで幅広く担当しました。中学生とはまた異なる雰囲気、教える側として体験できたのはよい経験でした。

困った点	特にありませんでした。授業の無いはずの土曜日に、しかも朝早くから、生徒達は静かに集中して自習していたので、自分も教えることに専念できました。そして、 <u>直接的であれ間接的であれ、学校の多くの先生方に支えていただきました。特に、教頭先生や学生サポートスタッフ担当の先生方からは多くの助言をいただきました。研究室配属の都合で 10 月からの活動には参加できませんでしたが、快く引き受けてくださり安心しました。</u>
------	--

H さん(学部生)―②	
活動内容	夏休みの間の活動でした。中学 1 年生から 3 年生までを対象として活動しました。授業の無い夏休みに登校し各自持参した教材を用いて自習している生徒に対して、生徒の質問に答えたり、つまづいている生徒に助言したりしました。生徒の数に対して学生サポートスタッフの人数が飽和していたので、1 対 1 でつきっきりで対応することができました。
感想	<u>自分の他にも大学の先輩方がこのボランティアに参加していました。その人達の指導方法や生徒とのやり取りを側で見たり、お話ししたりすることで自分に足りないことや伸ばしていくべきことなど自分一人ではなかなか気付きにくいことを発見することができました。</u>
困った点	特にありませんでした。直接的であれ間接的であれ、学校の多くの先生方に支えていただきました。授業や研究室配属の都合で夏休みの数日間しか活動に参加できませんでしたが、快く引き受けてくださり安心しました。

I さん(学部生)	
活動内容	中学三年生の勉強会の補助を行いました。活動は 12 月から参加していますが、不定期の土曜日開催なので現在 1 回のみ参加でした。
感想	<u>中学生との交流で思った以上に楽しかったです。わからない子にどうやったらわかってもらえるかの創意工夫ができる時間でした。参加できる日が少なかったのも、また新しく参加できる機会がありましたら参加したいと思います。</u>

J さん(学部生)	
活動内容	月 2 回程度、土曜日の午前中に中学 3 年生への学習支援を行った。
感想	基本的に生徒は自習し、その質問を受け付けるという形式だったが、その形式の方が様々なレベルの生徒が参加出来て良いのではないかと思った。
要望	事務局の常駐の時間がもう少し長いと嬉しいです。

K さん(大学院生)	
活動内容	中学校における学習支援
感想	子どものつまづきや理解方法に触れることができ、有意義であった。
困った点	低所得・低学力層を対象としたが接した子どもの多くは学習習慣が身についていた。

4. 平成26年度 学校ボランティア活動報告会・感謝状贈呈式

4.1. 活動報告会・感謝状贈呈式の概要

学校ボランティア事務局では、年度末に活動報告会と感謝状贈呈式を兼ねたイベントを実施している。現状の事務局と学生との関係では、活動開始時の説明会の際と、この報告会の場でしか直接学生と意見を交換しあうことができないため、生の声に耳を傾けることのできる貴重な機会である。昨年に引き続き、そうした「活動学生の声」に重点を置いて報告会を行ったが、長期休暇にすでに入ってしまったっており、活動学生が研究室などの学業で本格的に忙しくなり始める時期でもあるためか、実際に報告会に参加できる学生はごく一部である。その人数も年々減少傾向にあり、開催時期や、報告会の内容自体も改善する必要がある。

本年度の活動報告会の実施要項は次のとおりである。

【開催日時】 2016年2月12日(金) 14:00～15:00

【場所】 東北大学川内南キャンパス 文科系総合研究棟 203教室

- 【次第】
1. 開会のあいさつ
 2. 事務局顧問挨拶
 3. 2015年度東北大学学生の活動状況
 4. 活動者の声
 5. 感謝状授与
 6. 仙台市教育委員会指導主事からの挨拶
 7. 閉会のあいさつ

【参加者】 学生2名（うち活動者は1名）、仙台市教育委員会関係者1名、事務局関係者4名、計7名

今年度は活動者1名の他に、メーリングリスト登録者の学生が1名参加して、活動報告会を行った。例年は活動者の声を聴きながら来年度の活動者への支援に活かすことが、一つの目的だったが、今年度はこれから活動をしようと考えている学生からも意見を伺うことができ、より来年度の活動の参考となる内容を、事務局としては得ることができた。特に、メーリングリストの内容の改善提案の声が参加者から出たが、こうした声は普段耳にすることが少ないため、活動報告会のような機会ならではの意見といえる。同様に仙台市教育委員会指導主事の方からも、来年度の事務局の活動に対して建設的な意見をいただくことができ、今年度の活動報告会は事務局にとって、例年以上に、来年度以降の活動を大いに盛り上げるヒントを得る機会となった。

なお、昨年度同様、学生の参加の人数があまり多くなかったが、大学院生が活動者の半数近くを占めており、その大学院生は長期休暇中に関係なく研究室等の行事があることを考慮

すると、このような参加人数になることは致し方ないともいえる。来年度からは、学校ボランティアをまだ知らない学生にも、この報告会が活動開始のきっかけとなるような報告会を執り行いたいと考えている。

5. 平成 26 年度 事務局活動状況と課題

5.1. 活動状況

事務局の基本業務は主に、広報・活動者募集活動と活動者向け活動（各種手続きを含む）に分類される。

広報活動について、本年度は、前期に開講された全学教育教職科目（主に 1 年生対象）の講義において、学校ボランティアについての紹介を行った。さらに、教育ネットワークセンターを通じて、教育学部の新入生へのチラシ配布を行ったほか、教育学部棟の 1 階および 6 階に常設のポスターを掲示した。また、全学部生への広報を行うために、川内北キャンパス SLA サポート室の協力を得て、同室へのポスター掲示と活動内容の詳細が記されたファイルの設置を行った。その他、新規活動者を対象とした説明会を 5 月と 10 月に行った。

広報活動以外には、ボランティアを希望する学生への支援業務も行っており、この活動が事務局の主な業務内容にあたる。学生からの活動希望を受けると、事務局員が活動希望学生に対してボランティア開始までの手続きのほか、交通費、保険に関する説明を行う。本来は年度初めの市教委による研修会への参加が活動開始の条件となっているが、随時の活動希望者に対しては、事務局員が仙台市教委による研修会を年一回受講し、研修会を代行して行っている。次に、派遣先となる学校側にボランティア内容の詳細を確認するほか、学生のニーズを踏まえた調整を行う。このような一連の手続きを経て晴れて活動開始となるが、活動開始以降も随時、必要があれば連絡を取り合い、学生のサポートを行う。

さらに、今年度からは、学生サポートスタッフ事業以外にも、亘理町の長期休暇中のボランティア派遣や、仙台市内で中学生を対象とした学習支援の活動を展開している NPO 法人の広報支援も行った。

5.2. 本年度の課題と来年度に向けて

ここでは、学校ボランティア事業とその運営を行う事務局が今後のよりよい発展を遂げるために、本年度、事務局として行ってきたことから得られた課題や来年度に向けての改善点などを各事務局員の視点から述べる。

事務局の代表として組織の今年度を振り返ると、なかなか思うようにいかない点が多かったように感じられた。活動者も、活動内容も例年通りの活動をこなすにとどまってしまう。自分の意識の問題なのか、果たしてそれ以外の問題なのかはさておき、来年度こそはどんどん新しい取り組みにもチャレンジしていかなくてはならない。

来年度は、今まで集めていなかった「学生のニーズ」を回収し、そこから学生が活動しやすいボランティアとは何なのかを探してみたい。学生からの意見でもあったが、事務局の支援体制（現状週2回、各2時間程度の常駐サポート）の見直しも図っていくべきだろう。（S）

今年度事務局を務め感じた課題が2点ある。1点目は興味をもってくれても活動まで実際に行っていない人が多いことである。今後はどのような点で活動に踏み出せていないのかを調査し、改善していく必要性を感じる。参加しやすいプランを提案することも有意義かもしれない。

2点目は活動者や希望者と事務局との関係が薄いことである。手続きの際は連絡を取り合うが、活動が始まると関わる機会は少なく、十分に援助ができていたかわからない。今後は実際に会う機会を増やすなどして、活動者や希望者に関わっていききたい。

来年度は、上記の課題解決に取り組みつつ、より活動を活発化すべく新しいことにも積極的に取り組んでいきたい。（H）

今年度一年間活動してみて感じたことは、メーリスに登録した後、実際に活動するに至るまでに大きな壁があるということである。

講義やバイトなどの個人的な要因もあるだろうが、大きな要因となっているのは活動を始めるまでの流れが分かりにくいことにあるのではないだろうか。一度説明会に参加していただければ活動は可能である、という点すら伝わっていない時もあった。より多くの人に実際に参加していただくためには、説明会のあり方を見直す、定期的にメーリスで活動開始までの流れを確認する、などの工夫が今後必要であると考えている。

また、学校と一対一で連絡を取り合うことに不安を感じる活動者もいた。事務局が仲介する段階以外でも、事務局が活動者をフォローすることは可能であるということにより強く知らせていくことも必要であると考えた。（F）

私は今年度の11月ごろから事務局の活動を開始しました。きっかけは偶然学内で学校ボランティアの説明会のチラシを目にし、参加したことでした。しかし、それまでに学校ボランティアについての広報を認知したことはなく、そのような活動があることを知りませんでした。学内での宣伝については教育学部をターゲットの中心としているため、教育学部でない私にはなかなか目につかなかったのだと思います。

実際の活動者を見ると教育学部生だけでなく、その他の学部にとっても学校ボランティアに参加したいと考える人は多く存在すると思います。また、院生の参加率も高く、自分たちの考えている学校ボランティアの需要と実際の需要の間の差が感じられます。ボランティアの質から考えて、教育学部生への広報を中心にしながらも、参加したい

と考えるその他学部、院生の方へ活動を提供できるように考えてゆかねばと思います。

(M)

今年度を振り返ると全体的には「停滞の年」であった。昨年度は Facebook の開設や依頼学校の一覧を web 上のマップで表示するなど、新しい大きな変化が随所に見られた。しかし、今年度は特にそのような変化はなく、昨年度と同じ作業をこなした年であった。しかし、そのような状況下でも小さな変化は随所に見られた。更新が停滞気味だった Facebook を自主的に更新するメンバーがいれば、活動内容を学生に伝えるメールリストの文面を工夫して、読者の興味を引くように改善するメンバーがいた。このように、事務局のメンバー一人ひとりが「何をすべきか」、「どうすれば組織がよくなるか」を自身で考えて行動する姿が見られた点は、非常に良き収穫であった。

今年度見られた小さな変化を継続しつつ積み重ねていくことで、事務局全体の組織力が向上し、それが活動を希望する学生へのサービス向上につながると確信している。そこで来年度は、このような変化を大切にしつつ、事務局員同士でのコミュニケーションを深めることで連携を強化し、事務局の組織力向上を目指したい。(T)

今年度は、ネットワークセンターへの常駐や、毎週のミーティングを実施するようになって 2 年目となり、学校ボランティア事務局としての活動のルーティンが定着してきた年となった。他方で、実際の活動者の増加には結びつかず、そのことが停滞感につながっているように思うが、活動者と学校・市教委との連絡調整、広報が主な活動であること、活動の主体が学生であることなどの制約を考えると、事務局としては十分な努力を行ってきたのではないだろうか。それだけに、人的資源や時間的資源が限られている現状で、どのような戦略を立てるかが、来年度以降に問われることになる。教育学部以外への広報の展開、活動希望者から活動したい学校を挙げてもらうことなどが、さしあたって考えられるだろう。(G)